

ニジェール支所便り

支所長よりひとこと

最後に雨が降ったのがいつだったか忘れてしまうぐらい雨も降らなくなり、ニアメでも朝晩には少し肌寒く感じるような季節になりました。

10月下旬、5月以来の人道援助関係者によるハイレベル会合が開催されました。

人道活動・災害管理大臣、国土整備・コミュニティ開発大臣、国連諸機関のトップ、各国大使が参加し最近の情勢について共有されました。

ニジェール全体の国内避難民の数は約377千人(うちティラベリ州153千人、ディファ州149千人)、国外からの難民は253千人超、計63万人の避難者が存在。今年5月ごろから急増し、国内避難民は2019年比で倍近くになっています。ディファ州やティラベリ州では国による帰還オペレーションが始まっていますが、帰還先の復興、食料や安全の確保が大きな課題となっています。治安悪化による学校閉鎖は890校、うちティラベリ州だけで817校に上ります。

さらに、今年の洪水では327千人が被災。ザンデル州とディファ州の被害が特に大きく、全国の死者数195人のうち両州で138人を占めました。

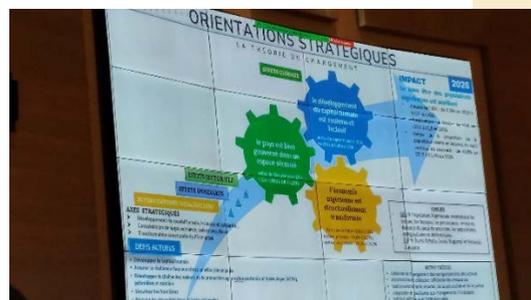
武装勢力による治安の悪化や多くの避難民、気候変動による洪水や食料生産への影響、貧困問題など沢山の課題を抱えるニジェールですが、政府は6月に新たな経済社会開発5か年計画(PDES 2022-2026)を採択し、11月1日、計画大臣が主催し概要を広く紹介する会合が開催されました(写真)。

PDES 2022-2026では、経済・社会発展の基礎を強靱にし、持続的な経済発展と、公正と進歩の果実の共有を基礎とする社会により、平和でよく統治された国家建設が目標とされ、3つの軸が掲げられています。

- ① 人的資本の発展、包摂と連帯
- ② ガバナンスの強化、平和と安全
- ③ 経済の構造転換

3つの軸のもとには、質の高い教育と職業訓練への公平なアクセス改善、国民の保健・栄養の改善、政治・行政・司法のガバナンス改善、汚職との闘い強化、治安対策の強化、民間セクターの発展、地方部の近代化、気候変動への強靱性強化など16のプログラムが掲げられています。5年間の必要資金は約300億ドル!!うち165億ドル!の支援がドナー、民間セクターから期待されています。

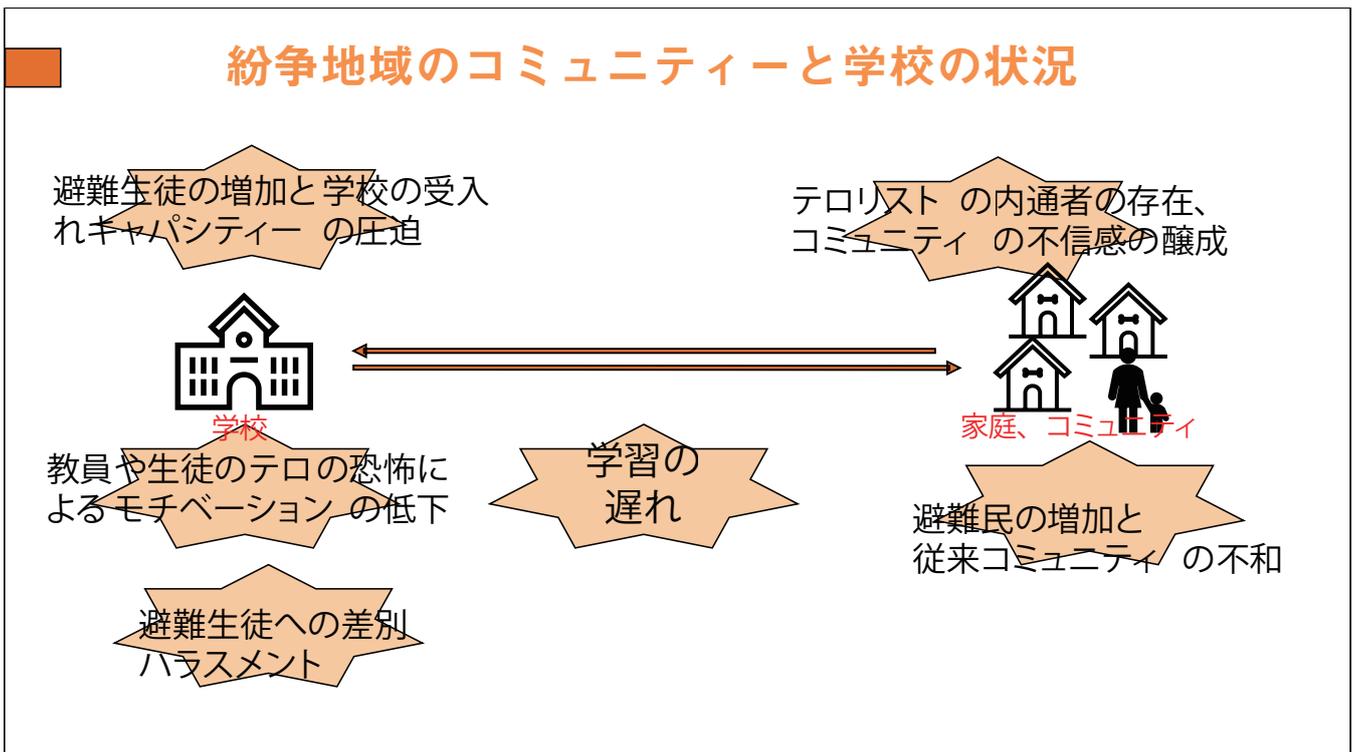
これからもJICAは、教育へのアクセス・質の向上、農業開発を通じた食料安全保障の強化、平和と安定の促進を重点分野に、他ドナーとともにPDES 2022-2026への挑戦を支えていきます。(小畑)



前回の支所便りで、プロジェクトから、紛争地域であるティラベリ州でおこなった、学校の安全状況に対する調査の結果報告をしましたが、その後、みんなの学校の平和構築モデルを「紛争地域でも学びをとめるな」と仮名を付けて開発中です。その様子を今回ご紹介させていただきます。

「紛争地域でも学びをとめるな」モデル

このモデルは、実績のある学力改善活動(PMAQ, TaRL, SRP)と危機管理活動から構成されています。成果を出しているみんなの学校の学力改善活動については、危機管理研修に先行して今回の対象校のあるティラベリ州トロディ県の43校に10月から導入されています。もともと生徒の学力が低いニジュールで対象校はさらに紛争やコロナといった原因で生徒の読み書き計算といった学力が悪化しているのです。この介入は効果が期待されますが、紛争地域での生徒の学びを確保するためにはまだまだ解決しなければならない問題がたくさんあります。以下は、紛争地域での学びの前に立ちはだかる課題のいくつかを図解したものです。



上の図に表示している課題の中で特に大きいのが、実際に難民生徒が多く加わった学校での受け入れキャパを越えてしまっていることや、テロリストへの恐怖やそのストレスによって摩擦や不和が起こっている個人やコミュニティへの問題です。この点、コミュニケーションや情報共有を主な強みとしているみんなの学校にとって、様々な情報を共有することで、上図の多くの問題を解決できる可能性が高いと判断しています。しかし、プロジェクトの課題は、どのような情報や知識を共有すれば、上図のような問題が解決できるかという点です。例えばテロの恐怖にどのように立ち向かうのか、トラウマに悩む大人や子供にどう対処したらいいのか、コミュニティ間の不和をどうやって解決するのか。プロジェクトは、すでにある様々な手法やノ

ウハウに学んでいかなければなりません。そこで、すでにこの分野で経験のある様々な組織や機関と接触しています。最近情報交換した機関としては、ヨルダンで平和構築案件を実施しているWorld Vision Japanがあります。この組織からは紛争によりメンタルなダメージを受けた子供や大人へのケアの手法を学んでいます。ブルキナファソのAction Educationからは、「Safe School」のアプローチの中で「危機における強みと脆弱性のマッピング」という技法を教えていただいています。ここでは、Safe Schoolの技法を今回のみんなの学校の試行にどう生かしていくかの方向性についてお話したいと思います。

「危機における強みと脆弱性のマッピング」とは

一言で言えば、コミュニティも含む学校関係者がテロの恐怖を正しく恐れ、冷静に対処するための手法です。具体的には、自分たちで、自分たちの周りにどのような危険があって、その危険がどのような危険で、どの程度深刻なのかということ判断し、その答えを活動計画に自分たちの出来る活動として落とししていきます。ほとんどの国にある学校活動計画の作成プロセスは、課題の設定とその原因分析から始まります。みんなの学校も同じです。学校の環境や学習や運営の課題を設定し、課題の情報をコミュニティに共有します。学習の質であれば、生徒の学力テストをして、その結果を情報として共有し、解決策を決め、活動計画を策定します。危険は、他の課題に比べ、情報として捉えにくいのが課題です。この手法では、危険という情報を人々への質問の答えから抽出するという方法で解決しました。情報から課題抽出できれば、解決策も考えることができます。だからこの手法の成否は、危険という情報を引き出す質問の内容にかかっています。それでは、この手法で実際に使われている質問をみていきましょう。質問は、コミュニケーション、知識、フィジカル、個人的配慮の4分野となっています。まず、知識分野の質問です。

知識分野の質問

- 危険に襲われたとき、何をすべきか知っていますか。
- 学校から逃げなければならない場合、どこに行くべきか知っていますか。
- 隠れなければならない場合、どこに行くべきか知っていますか。
- 危険が迫って道に迷ったとき、両親の居場所を知っていますか
- 爆発物から身を守る方法を知っていますか。
- 不審な人物（私たちに危害を加える可能性がある人物）を認識する方法を知っていますか。
- 電話の使い方を知っていますか。
- 施設のアラートコードを知っていますか。
- 危険、苦痛、エンブレム、組織（赤十字、UNHCR、ユニセフ、HI、DRC など）を認識する方法を知っていますか。

コミュニケーション分野の質問

- 誰があなたを助けることができますか。
- 学校とコミュニティと連携がありますか。
- 学校は 警察の電話番号を知っていますか。
- 教師と校長は、生徒両親の名前と電話番号のリストを持っていますか。

- 各教師は、クラスの生徒の保護者の電話帳を持っていますか。
- 家に帰る道を見つけることができますか。
- 危険な場合に校長や教師に警告する通信システムはありますか。
- どのような種類と通信手段が使用されていますか。
- コミュニティ内で私たちを助けてくれる人はいますか。
- 危険が発生した場合の各人の役割は何ですか。
- 私たちの施設にアラートコードはありますか。

などなどです。フィジカルな質問も含めて、以上は課題抽出ですが、以下の個人的配慮での質問は違ってきます。

個人的配慮での質問

- この危険の問題に立ち向かう私たちの強みは何ですか
- この危機の状況に対処するには、相互の信頼、友情、または良好な人間関係がどのように役立つでしょうか。
- 生徒は教師を信頼していますか。
- 生徒たちはお互いを信頼していますか。
- 考慮すべき特別なニーズがある人はいますか。
- 危険な場合に彼らを助ける準備はできていますか。
- どのようにそれを行う予定ですか。
- 攻撃が発生した場合に役立つ対人スキル、考え方は何ですか。または危険の兆候。
- 危険な時、私たちは平静を保つことができますか。

ここでは、相互の信頼、友情、助け合いなどが強調されています。

以上の質問の答えは身の回りの危険の情報となり、答えた本人は危険の認識ができるようになります。情報から危機がわかり、その危機に対する実現可能な解決策を活動として、活動計画ができるというのが、この手法です。みんなの学校の場合は、学校で住民総会を開くことができるので、そこで、ニジュールのコンテキストの質問をできれば、この手法をうまく取り入れることができそうです。さらに紛争のトラウマを持った児童のメンタルケアに対しては、World Visionだけでなく、Safe School の中でもモジュールがあり、非常に重要な分野ではありますが、限られた研修時間の中で、どのように効率的で結果がでる研修を行っていくのか将来的にとり入れることも視野にいれて取り組んでいきます。

(みんなの学校プロジェクト 専門家一同)



ご意見・お便りはこちら！ ni_oso_rep@jica.go.jp
過去の支所便りは[こちら](#)もしくは右の QR コードから
編集長：支所長 小畑 / 編集・デザイン：企画調査員 山本



PASVA：農業普及システム改善プロジェクト

ニジェールのジミ・ヘンドリックスをご存じですか?～デザートロッカーMdou Moctar～

農業普及システム改善プロジェクト(PASVA)は第2期を2022年8月に終え、第3期に向けて準備を進めているところです。現在は(執筆時の10月上旬)プロジェクトの端境期にあり、ここでは業務の事は一旦忘れ、ニジェール音楽に関することを紹介します。

先日、ロック好きの日本の友人と喫茶をした際、「ニジェールで仕事しているって言ってたよね。Mdou Moctarっていうミュージシャン知ってる?現代のジミ・ヘンドリックスでしょ?」と、言われました。私は西アフリカ音楽に関する深い知識はありませんが、一般的に有名なTiken Jah Fakoly(コートジボワール)、Alpha Blondy(コートジボワール) Youssou N'Dour(セネガル)、Salif Keita(マリ)などはよく聞いたもので、ブルキナファソの協力隊時代、当時は治安が良く、ライブをよく観に行っていました。しかし、友人が言っていたMdou Moctarの事は全く知らず、ジミ・ヘンドリックス好きの私としては興味がわき、友人と別れた後、すぐにスマホを取り出して調べました。

Youtubeで検索をしていたところ、ロックミュージシャンを紹介しているYoutuberが「【砂漠のジミヘン】Mdou Moctarが全ロックファン必聴の理由」というタイトルでMdou Moctarのことを語っているのを見つけました。動画の内容やその他のサイト情報を基に説明すると“Mdou Moctarはタウア州 Tchintabaraden村出身、30代後半のギター&ボーカリスト。ジミ・ヘンドリックスやヴァン・ヘイレンから影響を受けた高度な技術のギター奏法で、ブルースとTakambaというニジェール、マリのソンガイ族、トゥアレグ族の民族音楽を基に演奏している。これはデザートロックというロックのマイナーなジャンルに属しているが、砂漠のジミヘンと喩えること自体がもったいないくらい、彼の独自性は高い。今後、日本でも彼の音楽を取り入れたアーティストはたくさん出てくるだろう”と大絶賛。私もライブ動画を拝見しましたが、ニジェールやブルキナファソのサヘル地域でよく聞く民族音楽に、高度なギターテクニックで攻めた演奏がうまく融合しており、斬新ながらも古き良きアフリカ音楽を聴いているようで感銘を受けました。しかし、本プロジェクト関係者の現地人にMdou Moctarの事を尋ねても、誰一人知っている人はいませんでした。ヨーロッパを中心に世界的に有名であっても、国内ではまだそれほど知られていないようでした。一方、ニジェールのデザートロックにはその先駆者が存在しており、特にBombinoがニジェール人であればだれもが知っているミュージシャンようです。彼もギター&ボーカリストでブルースとTakambaを掛け合わせた音楽を演奏しており、Mdou Moctarに比べればギターテクニックを抑えています、リズムカルでいつ聞いても飽きない、ロックを奏でております。

皆様もMdou MoctarとBombinoを聞いて、日々の忙殺さから解き放たれ、アフリカの砂漠を連想させる音楽で癒されてみてはいかがでしょうか?残念ながら権利の関係上、写真などを本記事に掲載できませんが、是非、Google及びYoutubeなどで「Mdou Moctar」もしくは「Bombino」をご検索ください!

(PASVA 町慶彦 専門家)

支所便り2016年7月号から不定期でお届けしている、京都大学アフリカ地域研究資料センター・大山修一教授の「ニジェールでゴミを集める日本人」シリーズ第37話。今回はニジェールの気候に沿った種子散布について寄稿いただきました。

わたしは首都のニアメでゴミを集め、それを運んで、荒廃地に投入し、荒廃地の環境修復を進め、緑化しています。この緑化は住民の希望に応じて、畑にも造成できますし、牧草地に造成もできます。あるいは、薪を集めるような森林をつくることもできたり、森林と牧草地を年ごとに畑にしたり、牧草地にしたり、用途を組み合わせたりすることもできます。

この緑化で生育してくる植物は、サヘル気候や土地に根ざし、適応した種ばかりです。今回は、その植物のなかで草本について紹介したいと思います。

ニジェール国立気象局のデータによると、2021年の1年間に、ニアメ市内(Niamey Ville)では561mmの降雨がありました。東京の年間降水量は1,530mmなので、3分の1より少し多いといったところです。ニアメの畑では、雨水はとても貴重なのです。

ニアメ市では降雨は2021年5月6日に1.8mmの降雨が観測され、最後の降雨は9月21日の1.6mmでした。およそ4か月半のあいだ断続的に降雨があり、7月に161mm、8月に267mmと、この2か月間で1年間の75%の降雨が集中します。そして10月から4月までに降雨はまったくなく、乾季になるというのがニアメ市の降雨の大きな特徴です。

日本語では乾燥地の緑化をよく砂漠緑化と言うのですが、中学や高校の地理で学ぶケッペンの気候区分によると、ニアメ市とその近辺はステップ気候(BS)となり、砂漠気候(BW)ではありません。ステップ気候では、乾燥が強いものの短期間に雨が降ります。そして、この降雨にあわせて、1年生の草本植物たちはすばやく発芽し、葉を展開し、花を咲かせて、種子をつけます。

種子散布の仕方は重力にたよるもの、風にたよるもの、動物や人間をたよるものとさまざまですが、ニジェールでは多数の家畜がおり、餌を探しているため、家畜との関係がその植物の生存に強く関係します。家畜に食べられて、繁殖できないような植物はサヘルでは、けっして繁栄することはできません。



雨季が終わった緑化サイト。
ゴミを置いたところには、1年生の草本が生育し、牧草地となる。



収穫が終わったトウジンビエ畑。畑には家畜が放され、ウシやヤギ、ヒツジが食べれる植物をすべて食草します。

たとえば、サヘルの重要な主食作物であるトウジンビエはニアメ市内でもたくさんの畑があって、ひろく栽培されます。トウジンビエの果実(穀粒)の大きさは直径2mmほどと小さく、10gの種子を数えると、実に1000粒もあります。首都のニアメではトウジンビエは高価で、単位量あたりにすると米やキャッサバ粉の方が安いので、トウジンビエの消費量は減りつつあるのが現状です。

トウジンビエはほかのキビ属の植物と異なり、果実が内外穎に堅く包まれることがないため、運搬中や脱穀作業中に穂から脱落しやすく、そして脱穀作業のなかで、種子がたやすく飛び跳ね、床や地面に落ち、人が捨てるゴミのなかにたやすく混ざります。



トウジンビエの穂と穀粒。

穂を刈り取る収穫作業中に穀粒が穂から脱粒し、落果することもあります。



トウジンビエの脱穀・風選作業をするフルベの女性たち。

風選作業により、軽いもみがらや穂軸のかげらといった非可食部分は風に飛ばされ、重い種子は下にかまえるひょうたん容器のなかに入ります。しかし、風がすこしでも強く吹けば、種子はひょうたんに入らず、風で飛ばされてしまうこともあります。

そして、トウジンビエの種子は人間の食料としてだけでなく、家畜の好物でもあるのです。ウシやヤギ、ヒツジはトウジンビエの葉や稈だけでなく、種子を好んで食べます。そして、その種子はすべてかみ砕かれずに、糞とともに排泄されます。トウモロコシのような大きな穀粒であれば、歯でかみ砕かれるのかもしれませんが、トウジンビエの種子は小さいがゆえに口のなかに入っても、すり潰されることはありません。そしてトウジンビエの果皮は堅く、厚い膜である厚膜細胞で覆われているため、たとえ種子が胃の中に入っても残り、糞とともに排泄されるのです。

そして、もうひとつの特徴は、トゲの多い「ひつつき虫」をつける草本植物が多いということです。わたしがニジュールで着用する服は通気性のよい速乾シャツやジャージのズボン、メッシュ状のスニーカーが多く、緑化サイトや畑のなかを歩くと、ものすごい数の「ひつつ



緑化サイトに落ちているウシの糞。

牛糞の表面に白い粒が見えるのがトウジンビエの種子です。農耕民がこんな牛糞を見ると、牧畜民の家畜が畑のトウジンビエを食べていると疑い、農耕民と牧畜民の紛争に発展する危険性もあります。

き虫」がつきます。ハウサ語でカレンギアと呼ばれるイネ科の草本 (*Cenchrus biflorus*) は小さな種子を囲む稃(もみがら)に硬毛が生えており、この毛の先端は鋭くとがっています。硬毛はあちこちの方向に向かっていて、しかも簡単に抜けるので、ズボンにひついた種子をとろうとすると、ズボンに種子がひついたまま、指にトゲが刺さります。わたしは、この植物のトゲが親指にささって、昨年にえらい目に遭いましたが、このことは次回以降で紹介したいと思います。

このカレンギアだけでなく、ハウサ語のマラス (*Zornia glochidiata*: マメ科) やガルマニ (*Sida cordifolia*: アオイ科) などの草本の種子も「ひつつき虫」で、カレンギアほどでないにしろ、衣服から取り除くときには若干の注意が必要です。食草する家畜の体にはたくさんの「ひつつき虫」がつき、遠くまで種子が運ばれていきます。サヘルに生育する植物たちは、こうして人や家畜の行動を利用し、種子を散布するのです。



種子のトゲがするどいカレンギア。
若く緑色のときにトゲはやわらかいが、熟して茶色になるとトゲは堅くなります。



わたしのズボンについた「ひつつき虫」。
雨季の終わりに畑や緑化サイトを歩くと、ズボンや靴に多数の「ひつつき虫」がつきます。不用意に取ろうとすると、指にトゲが刺さります。

今月の支所活動：国家稲作振興戦略（NRDS）ローンチイベント



これまでも支所便りでお伝えしてきました「アフリカ稲作振興のための共同体(CARD)」の取り組みに関連して、国家稲作振興戦略(NRDS)のローンチイベントを9月12日に開催しました。

CARDについておさらいすると、このイニシアティブは2008年のTICAD IVに立ち上げられ、これまでアフリカ諸国のNRDS策定と各国の戦略に沿ったコメの増産を支援してきました。結果、2008～2018年にはコメ生産量の倍増を達成し、2019年からはニジェールも加盟国に加わり、2030年に向けさらなる生産量倍増を目指しています。

本ローンチイベントでは農業大臣、商業大臣、3Nイニシアティブ長、県知事、市長、伝統的な首長、民間セクター、他ドナー機関、メディアなど80名以上が全国より集まりました。2030年の目標年に向けて、こういった目標を掲げ、こういった戦略で進んでいくのか、明確な指標とその根拠と共に参加者は理解を深めました。その後の質疑応答では「地元米の生産を保護する政策の必要性」、「農業協同組合による灌漑農業整備の管理能力の向上」「担当を定めたロードマップ作成の必要性」「化学肥料、品質の良い種子の入手困難さと高コスト」など、昼休みを忘れるほど多岐にわたるテーマや質問が届き、農業省のタスクフォースの回答により参加者は十分に理解を深めて会場を後にしました。

本ローンチイベントを皮切りに、CARD地域コンサルタントとタスクフォースは既に様々なドナーとの協議を始めています。そしてNRDS常設事務局も農業省内に設置され、ニジェールの米生産振興に向けて、さらに加速させる準備が整いました。私たちも本戦略が絵に描いた餅にならぬよう、引き続きフォローを続けていきたいと思えます。

(企画調査員 山本)



離任のご挨拶

ニジェールから帰国して早くも2か月が過ぎました。秋もすっかり深まりまして、おかげさまで日本の秋の味覚を堪能する毎日です。

中でも芋、栗、カボチャはとてつもなくおいしく料理からお菓子からおいしくて仕方がありません。

先日、地元の里芋が大きくてきれいだったので思わず購入し、その日のうちに料理をしようと台所で手に取った時に、マンカニという言葉がふいに頭に浮かびました。

ニジェールの現地語で里芋はマンカニと言います。その里芋の季節になると、ニジェールではゆでた里芋を女の子が頭にたくさん載せて、町中を売り歩きます。仕事の合間にニジェール支所の運転手や警備員はそれを購入し、ヤジと呼ばれる香辛料を付けながらおやつに食べます。私も一度路上で買って、その場で食べずに家で皮をむいて煮物にしたところ久しぶりの触感がおいしく、はるかニジェールの地で里芋を食べることができたのがとてもうれしい驚きでした。別の日に、もし売り子の女の子が通ったら買ってこれと運転手に頼んだところ、その日から毎日里芋を買ってくれるようになりました。正直、そう毎日たくさんは食べることもできず、冷凍庫の中が里芋だらけになり、困ったような笑えるような状況になったのを思い出しました。

ニジェールには他にも微妙な時間にちょっと小腹がすいたときに手軽に食べられるドーナツ系のお菓子、串焼き、ゆでたイモ類、イナゴの佃煮、各種木の実など、おやつの種類は事欠かないのが、常日頃から面白いなあと思っていました。町中で新しいものを見かけるとすぐ支所の運転手や現地職員に「あれ何？食べたい!」と冗談交じりに言うのを彼らは真剣に受け止めてくれて、すぐに手に入れてきてくれていました。自分たちの食文化を知ってほしいという気持ちと、相手への思いやりが形に現れたもので、それは私の知るニジェール人の気質をよく表している行為だったんだなああと日本で里芋を手にして今更ながら、彼らに感謝の気持ちでいっぱいになりました。ニジェールで過ごした時間が楽しく、素敵な日々だったと改めて思います。

また、これからほかの国でほかの人たちと仕事を
していくと思いますが、人とのつながりを大切に過ご
していきたいなあと思います。お世話になった方々
に改めてお礼を申し上げます。（大出）



ご意見・お便りはこちら！ ni_oso_rep@jica.go.jp
過去の支所便りは [こちら](#) もしくは右の QR コードから
編集長：支所長 小畑 / 編集・デザイン：企画調査員 山本



着任のご挨拶



ニジェールの写真

援助調整の企画調査員として着任しました大弥と申します。

初めての内陸国に久しぶりのアフリカ。ニジェールの空港ではポーターに囲まれるのではないかと、税関に止められて何か言われるのではないかなどちょっとした緊張感がありました。案の定、ポーターが近寄ってきて、20ユーロでどうだとも言われるのかと思いきや、「君の荷物はあっちから出てくるよ」と声をかけられたあと紳士的に去っていく姿に肩透かしです。

それから野菜屋、果物屋、屋台いずれでも価格交渉なくニジェール人と同額で購入できてることに安堵しています。

生活は夜明けのアザーンに加え、朝6:45にはお向かえの国家警備隊宿舎からのラッパ。その後は皆でジョギングしているであろう掛け声が聞こえてきます。

また、居住して早々に電気のブレイカーや水ポンプが壊れるなど着任あるあるは経験しましたし、家に植えてあるモリンガの所有権をめぐるっては警備員と言いかいになったりしました。家賃と水代を払っているのは私だ!いや、植えたのは俺だ!と。結果、共同資産になりましたが、お互いに相手より早く収穫したいがために未成熟なモリンガの収穫となっています。

不安定な地域情勢が続くニジェールではありますが、身近にはこんなに平和な時間が流れており、このまま穏やかに過ごせることを切に願っています。（企画調査員 大弥）